

松尾 弘毅（日本史学）

中世後期における北部九州と朝鮮

本論文は、中世後期（15世紀～16世紀）における北部九州の諸勢力と朝鮮との関係について考察を加えたものである。

本論は、壱岐・肥前の諸勢力による朝鮮通交を論じた第一部と受職倭人の通交活動と通交権について論じた第二部からなる。

第一部第一章では、壱岐を分割統治した松浦党一族の朝鮮通交について論じている。壱岐松浦党たちが、壱岐の倭寇勢力との関係を背景として朝鮮通交権を獲得し、その後それを拡大あるいは縮小させていくこと、15世紀中期以降、彼らの名義の中に多くの偽使が含まれてくることを明らかにした。

第二章では、松浦党一族の内、田平・松浦両氏の朝鮮通交と偽使問題について論じた。中世日本の対外関係において地理的に重要な位置を占めた地域の領主である両氏は、博多や南九州との結節点に位置するという地理的な条件を生かして大規模な朝鮮通交を行ったこと、日明貿易との関係から朝鮮貿易への志向性を低下させたこと、それに即応して対馬の偽使派遣勢力が両氏をモデルとした偽使派遣を行ったことを明らかにした。

第三章では、15世紀から16世紀にかけての五島の諸勢力の朝鮮通交について論じた。朝鮮漂流民の送還が彼らの通交権獲得・拡大の大きな要因となっていたこと、15世紀中期以降の宇久氏・奈留氏の朝鮮通交に対馬による偽使が多く含まれていたこと、従来指摘されていた16世紀代の五島と対馬の対立関係は、国内史料から検証すると、朝鮮通交の側面に限定されることを明らかにした。

第四章では、松浦党以外の肥前地方諸氏の朝鮮通交と偽使問題について論じた。肥前地方の一勢力となる九州探題渋川氏や有力国人千葉氏等の朝鮮通交は、朝鮮初期を除くと、博多商人や対馬関係者による偽使であったこと、1470年が偽使派遣において大きな画期となったことを明らかにした。

第二部第一章では、朝鮮初期に登場する前期受職人の活動と性格について論じた。従来、朝鮮の倭人授職政策は、倭寇懐柔政策であるとされていたが、ある程度の効果はあったものの、倭寇の完全な終息までには至らなかったことを明らかにした。

第二章では、壱岐の倭寇勢力を代表する人物である藤九郎と朝鮮通交について論じた。受図書人から受職人となった藤九郎の朝鮮通交の実態と複数の通交権相互の関係について検討し、藤九郎が前期受職人と後期受職人を分かち重要な通交者であることを明らかにした。

第三章では、壱岐藤九郎以後の後期受職人の性格と朝鮮通交権について論じ、前期受職人との比較により、通交倭としての後期受職人の性格と図書権益と受職権益の関係について明らかにした。

以上のように、本論文は、朝鮮から「三島の倭」と称された壱岐・肥前の諸勢力の朝鮮通交に関して、様々な新知見を提示している。よって本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに相応しいと認めるものである。